

---

# 牢獄の逢い

シェリー酒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

牢獄の出逢い

### 【Nコード】

N9158Z

### 【作者名】

シェリー酒

### 【あらすじ】

異世界召喚もの。美形人外×選ばれなかった平凡少女が出逢うお話。

## 一話

静寂。

風のない暗闇の中からくるりと身を翻すと、来訪者は慣れたように日和ひよりにべったりとくつついた。

青白い金属のような光沢がある髪は長く、頬は高級なアンティークドールそのものの透明感を持ち、髪と同色の長い睫が青水晶の瞳をぐるりと囲む。

大柄ですらりとした瘦身はふんだんに銀の装飾をまとわせた白い外套を着こんでおり、身動きするたびちらりと見える尖った耳には二匹の蛇が絡みつく銀細工が優雅だ。

悪魔的な美貌で彼が微笑んで首筋に口づけ、無邪気な仔猫のようにごろごろと懐いてくる心地よさに日和は流されそうになりながらも、いつものように力なく引き離れた。

「触っちゃだめだよ」

日和は掠れる声で呟くと、辛そうにごほごほと咳きこんだ。

この地下牢に囚われて以降、看守の気が向いた時にしか薬や食料が与えられず、まともな食事を摂れていないため、いつの間にかすっかり痩せてしまっている。罪びとの着るような薄い衣　以前いた世界の病院でよく見かけた入院服に似ている　からは腕や足が剥き出しになっており痛々しい。また青黒い痣のようなものが皮膚の内側からいくつも浮かび上がり、痣そのものが生きているかのよう  
に時々ビクリと脈打つのが何とも不気味だ。

「病気が感染うつっちゃうから、もう来ないでって言ったのに」

日和はそう言い、宝石のように光る彼の瞳から目を背けると、また

じつとじつとずくまっ  
た。

## 一話

日和が原因不明の病を発症し、この地下牢に隔離という名の幽閉をされる身となつてから、彼 青蛇 ブルウ・サーペント という種らしいゲブがいつからかやつて来るようになった。

ゲブは人間なんかほんの人睨みで殺してしまえるほど高位の魔物らしいが、そんな素振りを一つも見せず、毎夜当たり前のように現れ甘く微笑み、日和にくつついてくるだけで後は時々世間話をする程度。

もちろん日和だってそれなりに見知らぬ不審者に対する警戒心は持っていた。そう、彼の出現に初めはものすごく驚き、怯えたのだ。鉄格子を開けて入ってくるならともかく、いきなり同じ牢の中にぽんと現れたのだから、当然恐慌状態になり思わず泣き叫んでしまつたくらいだ。

しかしゲブは平然と日和のパニックが収まるまでごろんと寝転がり、じいっと見つめてくるだけで、その時はほんの数分経つとまた現れた時と同じくぽんといなくなつた。そんなことが何度も続けば自然に恐怖心も薄れるというもの。

ゲブは十話しかけたところでようやく一返すかどうかといった極端に無口な男（名前を知るのに一週間はかかったのだ）だが、誰も見舞いなどに訪れてくれることのない寂しい牢獄では、ろくに喋らずともこうして傍にいてくれるだけで心強い。

この薄暗い世界の中で、日和にとってゲブだけが救いだつた。

### 三話

一体なぜこんなことになってしまったのか。日和は牢獄の中、幾度も考える。

これまで特にこれといって良いことも悪いこともしていないし、トリップ物のテンプレートである不思議な物を拾ったり事故に遭ったり前世の記憶があるとか……そういう特別な出来事は一切なかった。そう、日和は毎日なんの変哲もない日々を過ごしていたのだ。

そうして訪れた運命の日は、一年ほど前だったか。

あの日、二人は姉妹で映画を見に出かけていた。

妹日和は、姉あずさが彼氏との約束をドタキャンされたから、という理由で、ちょうど封切りされたばかりの興味のない恋愛映画を見に連れて行かれたのだった。

「一人で見るのなんて嫌だもの」

そう言い笑う同い年の姉は妹の目から見てもとびきり綺麗で、とても双子だとは思えない。その美貌　念入りに手入れされたシミ一つない肌、研究された清純派乙女と小悪魔レディの中間メイク、染めたばかりのふわふわしたアッシュグレイの髪。何より出るところは盛大に出て、引っ込むところはしっかりと引っ込んでいる引き締まったスタイルの良さ！　は、黒髪ストレートに眠たげな瞳の、ぼやんとした平凡な容姿にすーんとした日本人形体型である日和の、自慢でありコンプレックスでもあった。

## 四話

双子といっても二卵生双生児であるため、華やかな美貌のあずさと童顔が唯一の特徴である日和はあまりにも似ていない。ゆえに日和は「あずさ嬢の引き立て役」や「妹ちゃんって実は貰われっこじゃないの？」なんていう口さがない言葉に、悲しいことに慣れっこになってしまったくらいなのだ。

その映画を見た帰り道でのこと。マクドでポテトとジュース片手に熱弁しただけでは言い足りなかったようで、先ほど見たラブシーンの講釈を未だに垂れ続けるあずさへ適当に相槌を打っていると、突然花火が暴発したような激しい光りが発生した。

途端、ふわんと身体を温かく包む花の香り。甘いような、寂しいような、どこかで嗅いだことのあるような、懐かしい香り。

「見つけた……」

耳元でそつと秘密を打ち明けるかのように囁く、声だけの不思議な存在に目を白黒させ、咄嗟に振り向くとあずさは気を失ってしまったのか、ちょうど膝から崩れ落ちるところだった。

そのため日和は慌てて姉の身体を支えるが、花の香りと不思議な声が体中に浸透してきて、じわじわと胸に訴えかけてくる覚えのない懐かしさに不安になる。しかしどうしても気になってしまい、一体何を見つけたってどういうの？ と心の中で呟いた瞬間。

## 五話

日和の疑問に応えるようにますます光りは眩さを増し、次第に轟々とざわめく渦となり、暴力的なまでの光の粒子に抗いきれずすると飲み込まれ、そのまま二人ともどこか　　つまり別世界　　へ転移させられていた。

はっと意識を取り戻すと、二人は一段高くなったところで、直径三メートルはありそうな血で描かれた魔法陣のようなものの中央に座りこんでいた。魔術の道具であるらしき、薄汚れた小壇や鏡の欠片に白いオールドローズ、動物のものらしき髑髏の眼窩は洞穴のように暗くこちらを睨んでおり、絞められて事切れた鳩それに古びた銀貨など、いかにもそれらしいアイテムが何らかの法則に従って配置されている。従って、どう樂觀的に見ても怪しげな儀式を行っていたとは思えず、不気味である。

彼女たちから少し離れたところでは、刺繍の鳥の嘴部分にきらきらとした石を一つ縫い取った腕章を付け、純白の法衣を着こんだ幾人もの神官たちがぐるりと取り囲むようにして頭を垂れ、跪いている。日和は有名なファンタジー映画で見たことのある、いわゆる黒魔術を連想させるその異様な雰囲気と、彼らが俯いているためよく見えるその髪の毛　　赤毛や茶髪はともかく、緑やピンク色してるとかあり得ない！　　に怯え、呆然として隣にへたりこんでいる姉の腕をぎゅっと掴んだ。



## 六話

二人の目の前には豪華な赤い外套に黒い襟巻をつけている小柄な男  
というより少年と言った方が正しいほど若々しい がいた。

星の光を紡いだような金髪に、花の顔かんはせへ見事な赤瑪瑙を嵌めこんだ  
かに見える瞳の持ち主であるが、何かの儀式を行っていたらしいこ  
の場所には不釣り合いな姿ではある。

彼は目の前に二人の少女がいることに一瞬驚いたように目を瞬いた  
後、ちらつと僅かに見比べてから、迷わずあずさへと手を伸ばした。  
彼の背には天使を連想させるような、小さな白い翼があった。

「美しき異邦の女神……白薔薇の乙女よ、そなたを待っていた」

ある特有の目的を果たすためだけに造られた、この演劇ホールによ  
うにがらんとした石造りの建物の中、よく響き渡る彼の声を聞き日  
和は何故か不思議なほどどきりと胸が高鳴り、息ができなくなるよ  
うな切なさを感じた。つい先ほどこちらに来る前の激しい閃光の中  
で嗅いだ、知らぬはずの懐かしい香りと似たものを感じたのだ。

しかし彼に見つめられながら手を差し伸べられたあずさも好ましい  
ものを感じ取ったようで、くるりとした大きな瞳を潤ませ、ぼうつ  
とした顔をしておとなしく彼へ手を引かれるがまま立ち上がり、そ  
のまま優しく抱きしめられていた。その姿は、少女に祝福を授ける  
天使の絵画のように映り、怖いくらいに、お似合いだった。

## 七話

そうして二人ともこの怪しげな神殿のような場所から出て、王宮らしき場所へ連れて行かれた。もちろんあずさは赤瑪瑙の瞳の彼にエスコートされながらだったが、日和の相手は言わばその他大勢である、腕章をつけた法衣をまとった神官であり、姉妹は別々の相手と共に、別々の部屋へ入室したのだった。

それ以降、日和はあずさに会うことはおろか手紙を渡すことでさえ一度たりとも許されず、己の身の丈を学ぶことを強いられた。

当然ながらこちらの世界、そして召喚された場所であるこの国のことを全く知らないため、日本式で例えるならアイウエオの字の書きとりや、幼い子供でさえ知っているような一般常識から、王宮では当然必要とされるテーブルマナーや淑女の振る舞い方など、この国そして王宮内で生きていくために必要だと思われる多岐に渡る知識を徹底的に教え込まれた。自分の現状を把握し、これからどう過ごせばよいのかということを理解させるために。

教育係としてつけられた年配の官女は、優しいとか怖いとかいう感情的な面を一切覗かせない機械人形のような女だったが、拜命した任務に忠実であれとする気質を持っていたため指導を怠ったり嘘を吐くことはなく、凍った表情筋で淡々と真実を教えてくれた。

## 八話

曰く、ここは日和たちの住んでいた世界とは異なり、短命種であるヒトの上に神聖なる古代種の王族が君臨する秀でた世界であつて、特にこの国の場合は魔術が独自の発展を遂げており、一方向のみだが別次元に対する召喚を行うことができ、栄誉ある王族の婚姻相手を呼び出すという古き慣習が根付いていること。

曰く、召喚時にあずさの手を取った天使 ブラアド・ピジョン は我らが銅鳩国の誇り高き王太子殿下であり、彼のためにこの祝福された地へ召喚されたあずさは彼の妻、将来この国の王妃となる高貴なる身の上の方となつたこと。

曰く、異世界召喚は毎回立太子の儀と共に行われているが、術式には何の間違いもないはずなのに何故か数百年に一度くらいでしか成功しないため、異邦の花嫁は百年の幸いをもたらすというお伽話のような言い伝えがあること。

だから今回の召喚成功を国民は大いに歓迎し、城下では気の早い住民たちが女神の来訪を祝うパレードを催しているだけでなく、他国からの女神に対する関心も急激に高まっていること、を知つた。

また二人同時召喚はただの失敗に過ぎず、日和は女神と双子であるという特殊な関係であるために間違つて共鳴した結果紛れ込んでしまっただけで、遺憾ながら一度こちらに来てしまった存在を元の世界に戻す方法はないのだと。

## 九話

こうして姉にいかなる接触行動も起こすことを禁じられ、初めのころは教育係の老いた官女に日本語でしたためた手紙を姉に渡してくれるよう頼み、懇願し、怒鳴り、ついには殴りかかったところで、あっさり魔術で捕縛されたことがある。いかに見た目が非力であっても、能力はその通りではないのだ。もちろん隙について与えられた部屋から逃げ出そうとしたこともあったが、特定の者のみしか開けられない扉であったため、もはや完全なる軟禁である。

よって、生きるために食事をとったり眠ること以外には、おとなしく官女から有り難いお話を聞き、栄えある銅鳩国のヒトになるための教えを受け入れるくらいしか、日和にできることは残されていないかった。

王宮では召喚後にすぐさま緘口令が敷かれたが、花嫁召喚失敗では縁起が悪いということ、何より大陸一の魔術式を操る国としての面子を保つためにも、日和の存在を国外はおろか国内でさえも知られるわけにはいかなかったのだ。

そのため街はもとより王宮の庭　穢れなき純白の楽園と謳われている国の誇りであり、一年を通してオールドローズが咲き乱れているという話を聞き、一度見てみたいと頼んだが黙殺された　にさえ出してもらえない日々が続いたある時、いつものように与えられた部屋に籠って本を読んでいると、日和は自分の腕にいくつか小さな青いあざが浮かんでいることに気づいた。あざといっても打ち身でできるような淡い色ではなく、まるで刺青や油絵の具で描いたかのように不自然なほど鮮やかな青だ。

## 十話

今まで見たことのない群青色に言いようのない不安を感じながらも、もしかして世界による傷の出方の違いかも知れないと思い、どこでぶつけたのだろうと怖々触ってみるが、不思議と熱も痛みもない。しかし怪我をしたから治療してくれと医者を呼びつけるのは気が引けるし、自分は明らかにいない方がいい存在なのだからこれ幸いと何をされるか分からないと思い、どうするべきか考えあぐねていた。日毎にあざの数は増え、比例するように咳がひどくなっていた。

日和が我慢の限界を超えてとうとう呼吸困難を起こして意識を失い、再び目覚めた時、そこはもう地下牢だった。

「女神さまに感染るといけないからね」

日和に対してヒトというよりまるで無機物を見るような視線を向けた、年嵩の医者らしき男は、そう言うなり、鉄格子ごしに牢の中へ申し訳程度の薬のようなものやパンを置くと、すぐに階段を駆け上がり地下牢から出て行ってしまった。質問することを許さないような、無駄のない素早さに、わたしこれでも王妃候補の妹なのにと、日和は内心ひとりごちた。

「どろして、わたしだけ……」

ちいさく呟いて、また咳をし、意識なく鉄格子のすぐ側に置かれた妙な色のどろりとしたその薬を手に取り、ぐいと一息に喉へ流し込んだ途端襲ってくる苦さに泣いた。見捨てられた……その感覚は、以前の世界ではあたたかなまどろみの中で庇護され生きてきた日和にとって、言葉にしきれぬほどの絶望だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9158z/>

---

牢獄の出逢い

2012年1月6日10時45分発行